

インタビュー

わたしのUターン



北海道出身

Uturn

株式会社ISID北海道
技術部 エンジニア

たかはし むねひろ
札幌市 高橋 宗宏さん(33歳)

平成8年、札幌の技術系の学校で工学を勉強。卒業したあと、小樽の企業に機械技術者として就職。ここで7年間勤務をするうちにCAD技術を修得。



平成15年、東京の自動車メーカーで派遣社員として勤務しているときにCAEに携わる。派遣社員から正社員になるために転職を考えるように。



転職活動の一環として「Uターンサポートセンター東京」に求職希望登録。現在の会社に面接をリクエストし、平成19年に採用が決定。

仕事探しのココがポイント!

1 特殊な業種でも、北海道にもさまざまな企業が存在するので、あきらめずに探してみる。

2 北海道の企業の情報をできるだけ集めること。求職希望登録者に配信される情報が役に立つ。

3 面接では緊張しすぎないで、これまで携わってきた仕事などを説明する。

北海道にはないとあきらめていたCAEの仕事

生まれ育った札幌市で機械工学を学んでから、小樽の企業で7年勤務し、それから東京の自動車メーカーに就職しました。そこでしばらく働いていましたが、派遣社員だったため、妻と子どもの将来のことを考えて、正社員になりたいと思うようになりました。転職するならばできれば北海道に帰りたいという気持ちはありましたが、無理だとあきらめていました。なぜなら、

やりたかったCAE(Computer Aided Engineering)という仕事がないと決めて込んでいたからです。

CAEとは設計をコンピュータシミュレーションによって検証する技術です。もともと機械技術者だった私はCADを多く扱っており、やがてCAEの技術も身に付けるようになりました。今日、自動車や精密機器などの製造業にとっては欠かせないものとなっていますが、CAEを行っている企業の多くは

関東に集中しており、北海道にはないと決めて込んでいたのです。そのため、はじめは関東での転職を考えていました。

ところが、札幌に子どもを連れて帰省した時のこと。実家の両親が、孫の顔を見てとても喜んでくれました。その様子を見て以来、いつでも子どもを両親に会わせられる北海道に帰りたいと強く思うようになりました。Uターンすることについては、小樽出身の妻も賛成してくれました。

求職希望登録をすると希望の会社が見つかった

北海道に帰りたい。でもCAEの仕事は北海道にはないかもしれない。半ばあきらめているところへ、インターネットでUターンサポートデスク東京の存在を知りました。そこへ行って求職希望登録を済ませてからしばらくすると、求人企業の一覧が送られてきました。その中に、CAEを扱っている会社がありました。「北海道にもCAEの仕事があった」と、さっそく面接を受けるためのリクエストの手続きを行いました。面接では技術と経験をアピールしたことが功を奏したのか、合格しました。こうしてUターンできることになりました。



エンジニアとして信頼されるのが夢

CAEの技術は日々進歩しているので、ついていくためには勉強が欠かせません。難しさもありますが、それが面白いところでもあります。現在の会社はCAEを扱っている企業の中でもリーディングカンパニーです。有名なソフトも世に送り出しており、そんな企業の現場で仕事をできるのは大変やりがいのあることと思っています。新しい職場ではコミュニケーションを大切にして、なるべく分からない点は質問するようにしています。正社員になったことによって責任が増した分、やりがいも感じています。今の目標は、エンジニアとして信頼されること。忙しさは前の職場と変わりませんが、札幌は車で移動しやすいので、休日には家族と公園に出かけたり、東京ではなかなかできなかったゴルフやテニスも楽しめるようになりました。Uターンしてあらためて感じ

ましたが、北海道の水はおいしいですね。東京にいた頃のように水を買うことはなくなりました。

大切なのはたとえ不可能に思えることでもやってみること。やらずにあきらめるよりも、とにかくやってみるべきだと思います。



高橋さんのお勤めは…

株式会社ISID北海道

株式会社電通国際情報サービスが、製造業向けにCAE(コンピュータ解析による製品性能の事前予測・検証)の技術支援サービスを行う拠点として、平成18年に設立。



詳しい情報は
<http://www.isid-hokkaido.co.jp>

採用担当者の言葉

株式会社ISID北海道
技術部長

岡本典臣さん

30歳代を過ぎた方の場合、即戦力となる技術と経験があることが、採用の条件となります。CAEを扱っている当社が求めているのは、コンピュータの知識だけではなく、生産技術の知識を持つ人材。加

えて、コミュニケーション能力があることもチームとして仕事をするためには重要な要素となってきます。これらの条件を満たしていた高橋さんは、今や当社にとって欠かせない戦力になってくれています。

